VIEW'S REPORT

4技能を問う外部英語検定試験を導入

グローバル人材の育成に向けて 筑波大が推進する入試改革の内容に迫る

筑波大では現在、「全学版アドミッション・ポリシー」を設定し、求める学生像を明確にした上で、全学的な入試改革に着手している。「グローバル人材の育成」という教育目標の達成に向けて、入試段階から様々な価値観や社会的背景を持つ学生を獲得することが狙いだ。

東京大が2016年度から推薦入試の実施を決定、京都大も同じく16年度から特色入試を導入することを発表するなど、現在、国立大で入試改革の動きが進んでいる。一方、教育再生実行会議の「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」（第四次提言）では、「能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換」が提言された。これを受け、中央教育審議会では、大学入学者選抜の改善に向けた審議が進行中である。

そうした中にあって、「グローバル化に向けた入試改革」を全学的に行うと発表した筑波大は、国際バカロレア特別入試の実施を決定するなど、その改革内容の先進性が特に注目を集めている。筑波大がどのような学生を求め、そのためにどのような方法の入試を行おうとしているかを知ることは、今後の国立大全体の入試改革の動きを展望する上で1つのヒントになるだろう。以下、その詳細をリポートしていく。

探究心や主体性に富んだ学生を獲得するために

筑波大が、学内関係者を構成員とする「入学者選抜方法検討タスクフォース（以下、タスクフォース）」を設置し、入試改革の検討に着手し

図　筑波大が行うグローバル化に向けた入試改革概要

●全学版アドミッション・ポリシー

「筑波大学は、自立して世界的に活躍できる人材を育成するため、本学の教育を受けるのに必要な基礎学力を有し、探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材を受け入れます。」

●入試改革の4つのポイント

1. 学生の自立性の涵養につながる入学者選抜
- 入学準備プログラム（仮称）、基礎強化プログラム（仮称）の導入
- 先導的研究者体験プログラム（ＡＲＥ）の全学的導入

2. 入学試験の国際化対応（英語検定試験の導入を含む）
- 国際バカロレア特別入試を含むグローバル入試を全学で実施（国際バカロレア特別入試は、平成27年4月入学者を対象として、平成26年11月の推薦入試に併せて、全学で実施する）
- 4技能（Reading, Listening, Writing, Speaking）を問うＧＴＥＣ　ＣＢＴ等の英語検定試験の導入

3. 現行入試制度の見直し
- 推薦入試定員比率の段階的引き上げ（40～50％まで）及び新たな基準導入（附属高校、既卒者、編入学者推薦及び大学教員推薦〈仮称〉）
- 学群単位での入試等「大括り化」
- 高大院連携プログラム構築（入学後の教育体制とリンク）

4. 業務体制の構築
- 大学教育高度化センター（仮称）の設置
- 入試業務体制の整備等（アドミッションセンター機能強化等）

●グローバル入試
- 国際バカロレア特別入試
- 帰国生徒特別入試（入学時期は選択制）
- グローバル30学群英語コース特別入試
- 私費外国人留学生入試
- スーパーグローバルハイスクール指定校入試

募集人員：各教育組織で若干名、募集単位：全学、選考方法：面接及び論述試験
アドミッションセンター対応

たのは13年5月のことだ。タスクフォースの設置に先立ち、「全学版アドミッション・ポリシー」を、「筑波大学は、自立して世界的に活躍できる人材を育成するため、本学の教育を受けるのに必要な基礎学力を有し、探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材を受け入れます。」と設定した。筑波大の入学者は、大学の教育を受けるための基礎学力を備えていることは当然必要であり、それに加えて、グローバルな舞台で活躍するための探究心や主体性に富む人材を求めていることを、アドミッション・ポリシーで明確に定めた。

タスクフォースでは、アドミッション・ポリシーに沿って入学者を選抜するために、「学生の自立性の涵養につながる入学者選抜」「入学試験の国際化対応」「現行入試制度の見直し」「業務体制の構築」の4つを課題として設定し、入試制度のあり方についての検討を進めた。そして、13年12月に入試改革の方向性を取りまとめた（図）。

多様な学生を受け入れるための入試改革

筑波大の今回の入試改革の中で最も注目を集めているのは、「入学試験の国際化対応」だ。国際バカロレア特別入試を含むグローバル入試を全学で実施し、一般入試や推薦入試（一部）では、英語の「Reading, Listening, Writing, Speaking」の4技能を測るGTEC CBT等の英語検定試験を導入すると発表した。

国際バカロレア特別入試は、早速、15年度入学生から実施されている。選考は14年9月から11月にかけて行われ、合格発表は11月となる。出願資格は、国際バカロレア（以下、IB）資格の授与者、あるいは授与見込み者で、日本語を母語とする者、若しくは「日本語B（HL）」を履修している者であり、なおかつ指定の科目を履修していることを条件としている。したがって、実質的には受験者も合格者も日本人が主となることが想定される。タスクフォースで主査を務めた阿江通良副学長（教育担当）は次のように説明する。

「実施初年度は、恐らく、海外のIB認定校で教育を受け、大学は日本の大学に進みたいという日本人受験生が中心になると予想しています。しかし、政府はIB認定校を18年度までに200校に増やすという方針を打ち出していますから、いずれは国内のIB認定校を卒業した日本人受験生の増加を見込んでいます。更に、16年度入試以降は、日本語を履修していない外国人受験生にも、国際バカロレア特別入試への出願資格を与えたいと考えています。

IB認定校の卒業者を対象とした入試を実施する大学は他にもありますが、全学規模で展開するのは本学が初めてです。今回は実施初年度であるため、募集人員を各学群・学類とも若干名としましたが、入試の定着と共に募集人員を確定していきたいと考えています」

筑波大が国際バカロレア特別入試を導入した狙いは、国際的な視野や経験を備えており、かつIB認定校での教育を通して、自主的に学ぶ・考える・挑戦する・表現するといった力を身に付けている学生が、数多く入学するのではないかと期待できるところにある。そうした力を備えた学生は、筑波大がアドミッション・ポリシーの中で求める学生像として掲げる「探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材」にも合致するものだ。

また、IB認定校出身者と一般の

筑波大
理事、副学長（教育担当）
阿江通良
あえ・みちよし
筑波大体育系教授。専門分野はスポーツ科学。学内では全学学群教育課程委員会委員長、体育専門学群長等を、学外では、日本体育学会会長、日本バイオメカニクス学会会長等を歴任。

高校出身者が、互いに刺激を受けながら共に学び合うことによって、大学教育の質を高めていくという狙いもある。今後、海外のＩＢ認定校で資格を取得した外国人の学生が、国際バカロレア特別入試を経て入学してくるケースが増えれば、多様な価値観・社会的背景を持つ学生が更に増え、筑波大で学ぶこと自体が、グローバル時代を生きる基盤を身に付ける場となることが期待できる。

「これまでも、本学には推薦入試などでＩＢ認定校出身の学生が入学してきています。彼らの特性や必要となる教育については、ある程度把握しています。本学は元々、留学生が多い大学ですし、教員の中にも、海外の大学で教育・研究に携わってきた者が数多くいます。今後、国際バカロレア特別入試の枠が広がったとしても、十分に対応できる自信があります」（阿江副学長）

前述のように、政府は、国内のＩＢ認定校を２００校にまで増やす方針を打ち出している。筑波大が先鞭をつけた国際バカロレア入試は、今後、各大学に広がっていくと予想される。

4 技能の習得度を測る英語検定試験を入試に導入

筑波大が「入学試験の国際化対応」として行ったもう1つの改革が、英語の「Reading, Listening, Writing, Speaking」の4技能を測るＧＴＥＣ ＣＢＴ等の外部の英語検定試験の活用である。全学で導入する予定であり、現在各学群・学類で実施時期や活用内容を検討中だ。

阿江副学長は、「日本人が世界で活躍する上で、弱点となっているのが英語」と話す。

「本学の学生を見ても、専攻分野では極めて高い能力を発揮しているにもかかわらず、英語に苦手意識があるために、留学をためらう学生が少なくありません。つまり、英語が出来ないばかりに、世界に飛躍するチャンスを失っているわけです。国際的な学会でも、諸外国の研究者とコミュニケーションが出来なければ、存在感が薄くなってしまいます。グローバル時代において、英語力は不可欠なのです」

更に、ＧＴＥＣ ＣＢＴ等の活用決定には、「高校段階までに、生徒が英語の4技能の基礎をしっかり身に付けられる教育をしてほしい」という高校の先生方へのメッセージが込められていると、阿江副学長は説明する。

「もちろん本学でも、より実践的な英語教育を行うために、外国語センター等の改革に取り組んでいます。高校、大学とで4技能を高める英語教育を継続的に行った上で、大学院段階ではＴＯＥＦＬで少なくとも5割以上の学生が留学可能なレベルをクリアできるまでに育てたいと考えています」

活用する外部試験には、ＧＴＥＣ ＣＢＴ以外に、ＴＥＡＰ（Test of English for Academic Purposes）なども検討している。ＧＴＥＣ ＣＢＴを選んだ理由は、「高校生を対象とした試験であり、学習指導要領を基本として4技能を測定する検定であること」、そして「地方の高校生でも受検が比較的容易であること」があったという。

活用法は学群・学類によって異なると予想される。

「求める学生像や英語力は学群・学類によって異なりますから、外部試験の活用も様々になると思います」（阿江副学長）

ＧＴＥＣ ＣＢＴ等の外部試験で一定のスコア以上であることを出願の条件とする学類もあれば、そうでない学類もあるだろうし、センター試験の英語の代わりに外部試験の受検を課す学類、個別学力試験で英語を課した上で外部試験も課す学類など、様々なパターンが出てくるだろうということだ。

いずれにせよ、筑波大では、従来のセンター試験や個別学力試験では測ることが難しい英語の4技能の力を、外部試験の活用によって測ろうとしている。国際バカロレア入試同様、この動きは今後、他大学にも浸透すると考えられる。

高大院連携を活用した推薦入試も検討

筑波大では、他にも入試制度の見直しを行っている。

まず、推薦入試では、定員比率を全入学定員の40～50％にまで段階的に引き上げていく。更に、新たな推

薦入試の方法として、附属高校推薦入試、既卒者・編入学者推薦入試、大学教員推薦入試などを検討している。

この中で、ユニークなのが大学教員推薦入試（仮称）だ。例えば、筑波大の教員が、出張授業やオープンキャンパスなどの場で、学問に対する高い探究心や潜在能力を持つ高校生と知り合ったとする。その生徒を中・長期にわたって観察し、筑波大で学ぶに足る能力・資質を持っていると判断したら、その教員が推薦者となって大学に生徒を推薦するという入試だ。阿江副学長は、「大学教員が、将来有望な高校生をスカウトするようなイメージです。不正を防ぐ仕組みを整えた上で、学内のコンセンサスが得られれば、ぜひ実現させたい」と意欲的に語る。

附属高校推薦入試は、高大院連携プログラムと連携して実施することを構想中である。このプログラムは、ある学問分野について高い関心や資質を持つ附属高校在学中の生徒を、将来は筑波大への推薦入学を経て大学院に進学することまで見据えて、高校・大学・大学院が連携しながらカリキュラムを設定し、質の高い教育を継続的に施していこうとするものだ。

また、「入試の大括り化」として、従来は学類単位で行ってきた入試を、学群単位に改めることについても検討している。学群単位で入学後、それぞれの学群において幅広い視野や知識を身に付けてから、専門分野となる学類を選択するというシステムだ。学生が将来どのような分野に進むにしても、その土台には領域横断的な知識が必要になるという考え方によるものだ。

入試改革と共に教育改革も進め、学生の意欲に応える

筑波大がこれらの入試改革に着手した狙いは、前述のように、アドミッション・ポリシーに明記した「探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材」を獲得するためである。国際バカロレア特別入試の実施や推薦入試の拡充は、一般入試では獲得できないような多様な学生を確保することにつながる。現在も、筑波大は、アドミッションセンター入試や国際科学オリンピック特別入試など、バラエティーに富んだ入試を実施している。

「これらの入試では、1人の受験生に対して30分から50分近い時間を掛けて面接を行い、生徒の志望動機や意欲、適性をじっくり見ています。本学のアドミッション・ポリシーに沿った人材を選考するのに適した入試方法です」（阿江副学長）

ただし、そうした入試では、学力面でばらつきのある学生が入学してくるというデメリットもある。そこで、筑波大は、大学教育を受けるための基礎学力が不十分である学生を対象に、入学前に課題を出す「入学準備プログラム」を実施することにした。更に、入学後は、特定の科目や分野の知識が不足している学生に対して、補習授業を行う「基礎強化プログラム」（仮称）も全学的に導入する予定だ。

このように基礎学力が不足している学生への手立てを講じる一方で、専門領域において大きく伸びる可能性を持つ学生に対しては、早期から特別に支援するプログラムの充実を図っている。

その1つである「先導的研究者体験プログラム」（ARE）は、1～3年生の早い段階から専門分野についての高い知識や関心を持つ学生が、4年生で行う卒業研究と同様の活動に取り組めるという制度だ。これを活用して研究を行いたい学生は、大学に研究計画書を提出。それが受理されれば、学生にはアドバイザー教員が付いて、研究費が支給され、4年生でなくても研究が出来る。プログラムは従来、理系学群の学生を対象に実施していたが、13年度からは全学群に対象を広げた。

「入試制度を改革することによって、深い探究心や主体性を持つ学生を獲得することに力を入れていますが、更に重要なのは、入学してきた学生に対して質の高い教育や支援を行うことで、大学として責任を持って世界的に活躍できる人材に育てていくことです。入試改革と共に、様々な教育面での改革もセットで行っていく必要があります」と阿江副学長は強調する。

筑波大は、「学生の入学後の教育支援」まで視野に入れた上で、今後も入試改革を推進していく考えだ。